

午睡のラジオ

ヨコテ

九州のとある地方都市の郊外、繁華街からバスで十五分ほど行ったところにある開発途上の住宅地に、深谷利香は会社勤めの夫と、半年前に生まれた赤ん坊の三人で暮らしている。疎らに建っている家々の中でも利香たちの住んでいる家は真新しく、小さいながらも庭があり、夫婦で造った花壇には色とりどりの花が咲き並んでいる。遠くには緑の山並みも見渡せ、晴れた日の午後は吹きすぎる風が気持ちいい。物干し竿には洗濯物がはためき、まさに平和そのものだった。優しい夫と可愛い赤ん坊の三人で過ごす平穏な日々――。

利香は赤ん坊を寝かせつけたあとの昼寝が大好きだった。

庭に続くリビングの大きな窓を開け放っていると、入ってきたそよ風がレースのカーテンを揺らし、リビングのソファで横になっている利香は、風を感じながらいつの間にかうたた寝を始める。

眠りを誘うのはラジオから流れてくるクラシック音楽。その番組が聴きたくて小型ラジオを買った。サイドボードの上に置かれたラジオは小さい割にはしっかりとした音を鳴らしてくれる。

三十分ほどうたた寝をして眠りから覚めると、点けっぱなしだったラジオからは後番組の『奥様、あなたの味方です』が流れており、いつも聴くとはなしに聴いている。

由樹さんは、今日は来ないようだな――と、利香は思った。

由樹は更地を隔てた隣家に住んでいて、このところ毎日のように利香の家にやってくる。ちょうど『奥様、あなたの味方です』の時間で、由樹はときどき、ラジオに耳を傾けながら番組のパーソナリティーや相談者に対し、自分の意見を辛辣に述べることもある。大概は利香も同調できるので、うんうん、と相槌を打つが、言い過ぎだろうと思うこともたまにある。由樹が来るようになった切っ掛けは、利香の趣味であるビーズ細工を面白がり、習うようになったからだった。

しかし、この頃では興味をなくしたようで、昼寝のあとはもっぱらお喋りの時間と化していた

。最初の頃はたわいもないお喋りだった。それはやがて愚痴になり、由樹の愚痴はこの一週間のうちに憎悪を持って語られるようになった。このところの由樹の、剥き出しの憎悪に異を唱えることは難しく、調子を合わせて頷くしかなかったので、利香は今日、由樹が姿を見せないことに何処かホッとしていた。由樹にはふたりの小学生の女の子がおり、子育ての先輩として頼りにしているが、ずけずけとハッキリものを言う由樹は、正直、苦手なタイプだった。由樹の家との間にある更地に、早く誰か引っ越してこないだろうか、と思うことがある。今の自分の役目を誰かに引き取って欲しかった。

利香はスーパーのチラシをテーブルにふたつ並べて、今晚の献立を考えた。

夫が帰ってくるのは七時頃。時間はたっぷりある。ふたつ並べたチラシを見比べ、値段と食材を天秤に掛ける。

なかなか決まらず、心と顔を上げると、目の端に赤ん坊が映った。傍らの籐ヨーランに寝ている赤ん坊は、まだ静かな寝息を立てている。この平和な空間には利香と赤ん坊と、そしてラジオから流れてくる音だけがあった。

「今日の相談者は四十五歳の主婦の方です。奥さん、こういったご相談でしょうか？」

男性パーソナリティーの朗らかな声で番組が始まった。

「相談したいのは、ご近所の、ことで……」

「ご近所で何か困ったことでも？」

「ええ、トラブルが、起きて、いまして……」

相談者の標準語はたどたどしかった。使い慣れていないらしく、緊張が窺える。

「具体的にはどういったことなんでしょうか？ マンションが建って日当たりが悪くなったとか、工場の匂いに耐えられないとか、いろいろありますよね。奥さんのところはどういったことなんでしょうか？」

「騒音……です」と、相談者が短く答える。

騒音によるトラブル——利香はチラシから目を離し、サイドボードのラジオに目を向けた。

利香の住むこの地域でも同じようなトラブルが起きている。利香も被害者のひとりで、少なからず悩まされている。だが、一番の被害者は何といても隣家の由樹だった。由樹はトラブルを引き起こしている張本人の真向かいに住んでいる。利香の家からは斜向かいだが、間に広い更地があるので由樹の家ほど酷くはない。このところの、由樹が零していた愚痴はそのことで、身につまされる話に、利香は自然と耳をそばだてた。

「騒音といいますと？」

「音楽、です。大きな音を、鳴らして……」

「最近はこの手のトラブルが多いようですね。この辺りも都会並みになったということでしょうか。以前、夜のピアノがうるさいって事件になったこともありましたね。あのあとどうなったんでしょうか、すっかり忘れていましたが……」

相談者の口数の少なさを補おうとするパーソナリティーの意図が感じられた。

「昼間ですたい、うるさかとは。ダンスミュージックばガンガン鳴らしてですね……夜中は静かです、旦那さんのおらすけん」

相談者はいきなり方言に変えた。気持ちを上手く伝えられなくて、もどかしく思っていたのだろう。大人しかった口調が、今は生き生きとしている。

利香にも覚えがあった。大学で東京に出た際、しばらくの間、利香は柄にもなく無口だった。

「ダンスミュージックということは、その問題のご近所さんはお若い方なんですか？」

「いいえ、とんでもなかです。私よりも十歳くらいは上ですけん、五十半ばじゃなかでしょうか。オバさんですたい。何か訳の分からん音楽ば大きな音で鳴らしてですね、嫌がらせですよ。本人が聴きたくて鳴らしとっとじゃなかです。このために買ったとでしょう、あんなオバさんがダンスミュージックば聴くはずがありません。嫌がらせして喜んどるだけですよ」

何処にでもある話なんだなあ——と、利香はつくづく思った。

この地域で起きている問題がまさにそうだった。由樹の家の真向かいに住む本村直美が、このところ毎日のように昼前と夕方にダンスミュージックを大音量で鳴らしている。その音は利香の家にも届くので、利香も苛々させられているが、更地のお陰で由樹が憎々しげに愚痴るほどの苦痛ではなかった。それでも由樹に、うちはそれほどでも、とは言えなくて、うちも困っているのよ、と話を合わせている。

「嫌がらせで騒音を立てるとは酷いですね。そもそもの発端は何なんですか？ いつ頃から始まったんです？」

パーソナリティーの男性が深刻そうに訊く。

「あの女が騒音ばたてるようになったとはこの二週間くらいで、発端はあの女がゴミの分別ばちゃんとせんだったからです。二ヶ月前に引っ越してきて、ある日、燃えるゴミにプラスチックが混じってですね、いままでそぎゃんことはなかったですけん、誰が間違えたのかすぐに分かったとです。だけん、注意したとです、東京とは違いますからって、分別の一覧表を持って行って。あの女のためにわざわざコピーしたとですよ」

相談者は一気に捲し立てた。

「奥さんの言うあの女、問題の女性ですね、この方を仮にAさんとしませんか。それですね、このAさんは本当に分別をしていなかったんですか？ 他の人だったかもしれませんよね。言い掛かりをつけられてAさんが怒って嫌がらせをするようになったとか、そんなことはないんですか？」

「何ば言うんですか。本人も認めましたよ、東京から引っ越してきて分からなかったて。こっちじゃプラスチックは燃えないゴミでしょう、ばってん東京じゃ燃えるゴミだそうですたい。一度注意しても直らなんだっけん、もう一回行ったとですよ。そしたら今度は、こっちの言葉が理解できんけん間違えたていうような、小馬鹿にしたような顔ばしてですね……違う環境に来て、戸惑っとらすとだろて思って、腹の立ったばってん堪えたとですよ。次からはきちんと分別してくれるだろて思ってですね、我慢したとですよ」

相談者が憤慨して言う。

東京から二ヶ月前——

問題の女性は本村直美ではないか、と利香は思った。この県に東京から越してくる人はそれなりにいるだろうが、二ヶ月前となればそうはいないはずだ。ということは、相談者は由樹か。近所の他の人かもしれないが、声は由樹に似ていた。もしも相談者が由樹だったなら、小馬鹿にしたような顔に思い当たることがあった。ゴミ出しをなかなか改めない直美に、近所の何人かで注意しに行った際、方言で話す由樹に直美は、もう一度仰っていただけませんか、と薄笑いで慇懃無礼に言った。不快に口を閉ざす由樹に代わって利香が標準語で話すと、直美はとってつけたような笑みを浮かべ、やっと理解できたという顔をして見せた。

「ところが話はそれで終わらなかったんですね？」

パーソナリティーが念を押すように言う。

「そぎゃんですたい。分別するどころか、これ見よがしに目立つところに置くようになってですね、再度注意すると空惚けて、知らん、の一点張りで……しまいには、誰かが自分を陥れようとしている、て言い始めてですね、もうあきれ果ててしもうて、うっちゃって構わんでおったとですよ。そしたら騒音の始まったとです」

「ゴミの出し方を注意したらそれが元でトラブルになり、騒音に発展したという訳ですか……」

「ちょっと待ってください。何ですか、注意した方が悪かてというような言い方じゃなかですか。私が悪かとですか？ 間違えたとは向こうじゃなかですか。私が悪かなら、何処が悪かか言うてください。私の何処が悪かとですか？」

この口調はまさに由樹だ、と利香は思った。高圧的で相手に反駁の隙を与えない言い方——正義は自分に味方しているとの絶対的な自信があり、完膚無きまでに相手を叩きのめさなければ気が済まない物言いは、ときとして誤解と蟠りを生む。それでも由樹はそんなことに頓着しない。

「そんなつもりでは……そう聞こえたのでしたら謝ります。申し訳ありませんでした」

「最初にゴミば分別せんだったとはあの女ですからね、間違えんでください」

「そうですね、仰るとおりです。ではこの辺で、コメンテーターの北林先生にお話を伺ってみましょうか。弁護士の北林先生、これまでの話を聞かれてどう思われますか？」

慌てた声でラジオのパーソナリティーは弁護士に話を振った。

「お話を伺っておりますと、どうも問題の根源は環境の違いにあるようですね。環境の違いから誤解が生じて、トラブルにまで発展することはよくあります。奥さん、Aさんとのコミュニケーションはどうだったんですか？」

北林弁護士は勿体ぶった喋り方で話を始めた。

「コミュニケーションですか？ いいえ。Aさんは最初から近所に融け込もうとはせませんでした。旦那さんの転勤で引っ越してこられたとですが、嫌々だったとでしょうね。一応、引っ越しの挨拶はあったとですが、三年経ったら東京に戻るようなことば言いよらしたけん、その間はいつでもよかとでしょうね。だけん、向こうからは何も話し掛けてこらっさんですし、コミュニケーションていわれてもですね……。こっちにはそのつもりがあったとですよ。慣れん土地に来て寂しかろうて思ってますね、声ば掛けたとですよ、買い物とか、いろんな行事とか……。ばってん、迷惑そうな顔ばしてですね、構わんでくれて言われたとです。誘ったこっちが馬鹿んごたるですけん、それからはやめたとですよ。前にも東京から引っ越してこられた人のおらしてですね、そん人は社交的で明るか人だったとです。ゴミも言うたとおりにちゃんと出してですね、買い物とかも一緒に行ったりしたとですよ。それに較べてあの女は……根暗ちゅうかへそ曲がりちゅうか、ろくなもんじゃなかですね」

「まあ、まあ、奥さん。その辺で……」と、パーソナリティーが相談者を宥める。

ろくなもんじゃなか——由樹がよく使う言葉だ。何かにつけ、由樹は気に入らないことがあると、ろくなもんじゃなか、を口にした。路面電車で騒ぐ子供であったり、マナーの悪いドライバーであったり、あるいは対応の遅い役所の窓口に対してであったり——最近はおっぱら本村直美に向けられていた。

利香は確信した、ラジオの相談者は隣家の由樹だ。自分が拳を振り上げなければ、問題は解決に向かわないと思い、困っている近所を代表して立ち上がってくれたのだろう。よくぞやってくれた、と利香は快哉を叫びたくなった。

役所は腰が重く、警察沙汰にするのは大袈裟に思え、どうしたらいいものか、近所の皆が頭を悩ませていたところだった。しかし、誰もが直美の家から聞こえてくる騒音の被害を受けていたのに、具体的な行動を起こす者は皆無だった。被害が一番大きくて、直美の家に一番近い由樹が何とかするだろうという思惑が皆の胸中にあったのは確かで、少なくとも利香はそう願っていた。

「それでは……コミュニケーションはなかったと考えてよさそうですね」

北林弁護士が重々しく言う。

「ええ。そぎゃんですね。向こうが扉を閉めてしもうたらこっちはどぎゃんも出来んです。東京者は近所付き合いばせんらしかじゃなかですか、東京でもあの女は同じだったとでしょうね。こっちに来て同じようにしたかったとでしょう、何もかも東京と同じように……」

「まあ、東京に住む人の皆が皆、近所付き合いをしないということはないでしょうが……やはりコミュニケーション不足が事態をいっそう深刻にしたようですね。慣れない土地に来て、過度のストレスを抱えてしまったために突飛な行動をとるようになったのでしょうか。Aさんは嫌々引っ越してこられたということですが、それはどういったことなんですか？ 何か事情があって……」

「事情も何も、旦那さんの転勤ですたい、よくある話の。急に決まったとかで、引っ越しの挨拶にこらしたとき、本当は単身赴任のはずだったと言うとらしたとです。ばってん、経済的な理由で東京とこっちの二カ所に別れて生活するのは出来なかったらしかです。給料の下がったとかで……」

由樹が直美の家の経済状態を面白可笑しく話すのを聞いたことがある。ゴミ問題が発覚してしばらくした頃で、いつの間にそんな内情を探り出したのだろうかと思いに思ったものだった。直美の夫は株やマンション投機で失敗しているらしかった。だから今住んでいる家も安く借りられるよう、会社の知り合いに世話してもらったということだった。

「給料の話までなさっていたとは意外でしたね、てっきり会話はほとんどないものと思ってましたから。そんな話をAさんがよくしてくれましたね」

「いえ、いえ。旦那さんですたい。あの女がそぎゃん話ばする訳のなかですよ」

「旦那さんですか。旦那さんとは交流があるんですか？」

「私はなかですばってん、うちの主人がたまに通勤の行き帰りのバスでいっしょになることがあって、そんなときにちょこっと話ばするそうです。世間話程度にですね」

「なるほど。旦那さん同士には交流がある訳ですね。旦那さんたちはこの問題、騒音に至るまでの経緯をご存じなんですか？」

「うちんところは知っとります。向こうも知っとらすとじゃなかでしょうか。迷惑を掛けて済みません、て謝ってくれたらしかです。ああ、これはゴミのときの話ですたい。この頃じゃ逃げるようにしてうちの主人ば避けとるそうです。近所に顔向けが出来んて思うとらすとでしようね。

あぎゃん嫁ばもろうて旦那さんは可哀想か。旦那さんも被害者ですたい」

相談者は心底、同情して言った。旦那さんには悪い感情を持っていないようだ。

「お話を伺っていますと、Aさんの旦那さんは協力的ではないようですね。Aさんに騒音をやめるように言っていないんでしょうか。普通なら旦那さんが止めるでしょう、そんな大きな音を鳴らしているのなら、いくら何でも気づくでしょうし——ひょっとして旦那さんはAさんが騒音を出して問題になってるのをご存じないんですか？」

「さあ、どぎゃんでしよう。旦那さんは気づいとらっさんかもしれんですね、あの女がダンスミュージックば鳴らすとは、平日の昼間に決まっとりますけん。もっとも、あの旦那さんなら気づいとったっちゃ何も言わっさんでしようね」

「それはどうしてです？ 気づいていたらやめるように言うのが当たり前じゃないですか。何か理由があるんですか？」

「さっき給料が下がった話ばしましたでしょ」

「それが……」

「給料が下がって地方転勤になっても会社に残るか、それとも退社するか、どっちがよかかて言われて、仕方なしにこっちにこらしたらしかです。ああ、これは旦那さんから聞いた話じゃなくて、主人が取引先から聞いた話ですたい。噂話ですばってん、多分、本当でしょうね。東京ば追われて、こっちでは閑職に追われて、すっかりやる気ばなくしとるらしかです。定年までのあと三年ばいかに恙なく過ごすか、それしか考えとらっさんとでしょ」

「都落ちして閑職に追いやられ、おまけにいろいろな失敗が重なって気力をなくされているのは、まあ、分からないでもありませんが……それでご近所の煩わしい問題に関わりたくないと思われましてもですな、二、三日でいなくなる旅行者ではないんですから、旦那さんにもしっかりと現状を認識していただかないと。奥さんはAさんの旦那さんとは面識はあるんですか？ Aさんが越してこられて二ヶ月ということですが、何回かお会いになったことは？」

「最初の一度きりですたい、引っ越しの挨拶にこらしたときの。それきり話ばしたことはありません。家から見掛けることはありますばってん、道で会うこともなかですし、休みの日は何処にも出掛けらっさんとです。顔ば合わせたくなかとでしょうね」

利香は直美の夫の顔を思い出そうとしてみた。しかし、臆気な印象しかなく、判然としなかった。利香も直美の夫にあったのは引っ越しの際の一度しかない。街中で擦れ違ったとしても気づかないだろう。

「旦那さんのいらっしゃる土曜とか日曜に訪ねられて、現状を教えてあげたらいかがですか？旦那さんを交えて話し合えばAさんも考えを改めてくれるかもしれませんよ」と、北林弁護士が諭すように言う。

「そぎやんでしょうか……」と相談者は懐疑的に言い、「あの女が考えれば改めますかねえ……」と鼻で笑った。

利香もそう思う。人の言うことを素直に聞く女だったならこんな風にはならなかったはずだ。直美には歩み寄ろうとする姿勢が初めから見えなかった。もともとそういう資質の女だったのか、それとも急激な生活の変化でそうなったのかは分からないが、いずれにしても、直美が今さら人の話を聞くとはい、利香には思えなかった。

「Aさんも、旦那さんの言うことなら聞いてくれるかもしれないじゃないですか。誰かがAさんに騒音をやめるように説得しない限り今の状況は続く訳ですから、その役目をAさんの旦那さんに託してみてもはいかがですか？奥さんがAさんの旦那さんに現状を詳しく話して、今度は旦那さんにAさんを説得してもらおうですよ」

「私があの方と話し合えばするとですか？」

明らかに相談者は不服そうだった。

「奥さんが嫌なら、奥さんのご主人でもいいですよ。以前は通勤の途中で世間話をなさってたんでしょう？でしたら、却ってご主人の方がいいかもしれませんね、向こうの旦那さんもお主人となら話がしやすいでしょうから」

由樹の夫は人当たりのいい優しい人だ。いつもニコニコしていて、利香も好感を持っている。由樹の夫ならうってつけかもしれない。

「主人を煩わせるのはちょっと……」

途端に弱気になり、相談者は言葉を濁した。

「どうしてです？ もう奥さんたちだけの話ではないんでしょう？ 地域の問題になっている訳ですから、ご主人にもご足労を願ってですね、解決に向かった方がいいと思うんですが……」

「それは分かっています。実は以前、話したことがあるとですよ、どぎゃんしたらよかるかて。そしたら嫌な顔ばしまして……」

あのご主人が嫌な顔を……。人は分からないものだ。利香は、由樹の夫の意外な一面を垣間見た気がした。困っている妻を黙って助けてくれるような良き夫だと思っていたのに、自分の夫と同じで、こういった問題には関わりたくないようだ。

「ご近所の問題は奥さん任せということですか、男の悪いところですね。しかし、どうにかして解決しなければならないんですから、そうも言ってられないでしょう？ 奥さんも駄目、ご主人も駄目、だったら他に誰か適当な方がいらっしゃるんですか？」

ラジオに耳を傾けていた利香は、ドキリとした。

適当な方——それは自分かもしれない。ゴミ問題の際、対立するふたりの間に入ったことがあるし、東京に住んでいたことのある自分に直美は親近感を抱いているようだった。直美は由樹の言うことには耳を貸さないだろうが、自分とは話し合いを持ってくれるかもしれない。このままではきっと自分が矢面に立たされる、と利香は思った。ご近所の代表とか何とかで、話し合いの場に遮二無二引きずり出されそうだ。そう思うと、快哉を送ったというのに、由樹が恨めしくなってきた。思い当たる人ひとりいます、とラジオから聞こえるのが怖かった。だが、違った。

「そう言われても、誰も思いつきません」と、相談者は静かに言った。

利香はホッと胸を撫で下ろした。

「他に適当な方がいらっしゃるんですけど、ここはやはり奥さんかご主人が引き受けるべきでしょう。厭な役目かもしれませんが、誰かがやらなければいつまで経っても解決しませんからね」

「あのう……」と言い掛け、間が出来た。相談者が次の言葉を迷っているようだ。パーソナリティーが慌てて声を掛ける。

「奥さん、どうかなさったんですか？」

「いえ、済みません。ひょっとしたら、と思ひまして」

「それは何です？」と、弁護士が話を引き取った。

「ひょっとして旦那さんがご存じだったら、話し合いばしても無駄じゃなかですか？ 旦那さんが何もかもご存じで、黙認して……黙認どころか、共謀なさってたらどうにもならんですよね」

「共謀ですか。そうすると、もはや住民同士の話し合いによる解決は難しいかもしれませんね、私どものような弁護士を間に入れないと。双方の言い分を聞いて……」

「もう警察に訴えた方がよかとじゃなかでしょうか？」

弁護士の提案を無視して相談者は言った。

警察——話が大きくなりすぎだ。それを避けるための相談しているのではなかったのか。確かに直美の行動は常軌を逸しており、由樹の我慢の限界を超えてしまったのかもしれない。今回の騒動の、ほとんどの要因は直美にあったといえる。しかし、由樹に全く非の打ち所がなかったかといえそうともいえない。あの頭ごなしの独善的な態度には利香も少なからず不快にさせられることがある。いや、由樹ばかりではない。自分を含めた地域住民にも非はあったはずだ。誰も直美の言い分を聞こうとしなかった。

それでも利香は、この問題を自分が何とかしようという気にはならなかった。関わらずに済むなら、それに越したことはない。

「傷害罪で訴えるということですか？ それはどうにもならなくなった場合でしょう。まずは手順を踏まれてですね、警察は最終手段と考えられた方が……。奥さんもそれは望んでおられないでしょう？ これからもご近所な訳ですし、住民感情からいって、大きなシコリが残りますよ」

「もうすでに大きなシコリがあります。どうにもならんところまできとりますよ。弁護士であれ、警察であれ、誰かが仲裁してくださって、あの女が騒音ばやめたっちゃ普通にご近所付き合いなんて出来ません。それに……。あの女は一時的にはしおらしか顔ばするかもしれんですばってん、それは見せ掛け、嘘に決まっとります。そのうちしれっとして騒音ば立てますよ」

「そんな風に思われていたら、いつまで経っても解決できませんよ。奥さんだって解決したいからこうして相談をなさっているんでしょう？」

「解決ですか……。解決できますかねえ」

またもや相談者は懐疑的な声を発した。

本気で解決したくて相談をしていたのではなかったのか、と利香は疑りたくなった。当初はそのつもりだったのかもしれないが、匿名をいいことにラジオで直美の悪口を言いふらしているかのようだ。愚痴の相手を自分からラジオの悩み相談に代えただけなのかもしれない。

「ずいぶんと悲観的ですね。では、奥さんはどうしたいんですか？ どうしたらご近所が上手くいくとお考えですか？」

「そらあ、決まっとります。あの女が引っ越してくる前の状態に戻ることです」

相談者は決然と言い放った。

「それはつまり…… Aさんを追い出すということですか？」と、弁護士が憂慮の声で言う。
「追い出すという言葉が悪かですよ。よそに行ってもらおうとです。そうするより他になか
でしょ？ それがお互いのためですたい」

直美を追い出す——由樹はそんなことまで考えていたのか。

利香は虚を衝かれた。

さんざん聞かされた愚痴の中にもそんな話がでたことはなかった。それは直美への脅しのよう
に聞こえた。

「しかしですね、Aさんにも居住権がありますから、出て行けと一方的にいうのは……」

「私たちにだって平穏に暮らす権利はあるとです。これまではそうだったとですよ。何も問題は
なかったとです。それをあの女が壊したとです。あの女が来てからですよ、おかしゅうなった
とは。私たちは前から住んどったとです。あの女があとから来たとですよ。あとから来て迷惑ば
掛けて、私たちには堪えろて言うतとですか？ そぎゃん理不尽な話はなかでしょう。向こうがお
らんごつなりゃそれが一番よかとです。そぎゃんじゃなかですか？」

相手をやり込める際の、由樹のいつもの口調——由樹の舌鋒の鋭さは弁護士に対しても鋭さ
を失っていなかった。

「奥さん、そんなに感情的にならないでください。余計に話がこじれますから」

パーソナリティーが困惑の様子で、慌てて口を挟む。

「困りましたねえ。奥さんの言い分は分かりますが、いくら迷惑だからって、出て行けと言うの
は乱暴ですよ。まだ二ヶ月なんでしょう？」

弁護士も困惑しているようだった。

「二ヶ月も我慢したとですよ。この先、あと三年も我慢しろて言うんですか。悪かとは向こうですよ。被害者は私たちなんです。先生も一度来てみなっせ。そしたらあの女がどれだけ厭な女か分かりますよ」

「奥さん、もうその辺で……。ここはやはり奥さんか、あるいは代表の方が一度じっくり、AさんとAさんの旦那さんを交えて話し合いを持たれはいかがですか？ それでも駄目なら弁護士に相談なさるといふ方向で考えられてはどうでしょう」

パーソナリティーは番組終了の時間を気にしているのか、結論を急いでいるようだった。それは、この相談者との話を早く終わらせたいだけのようにも聞こえた。

ラジオに向けていた視線を下げる。そこには赤ん坊が静かな寝息を立てて眠っていた。利香は、ここだけが平和だと思った。

答えるのをためらっている相談者に代わり、北林弁護士が話を継いだ。

「奥さんがひとりで行かれるよりも、もうひとりどなたかを連れて行かれた方がよろしいでしょうね。向こうの旦那さんを入れて、お互い二対二での話し合いですね。もうひとりをご近所の代表ということで……。いわば付き添いのような方ですね、そういった方がいると奥さんも心強いんじゃないですか？ その際、話し合いの様子をビデオなどで記録に残しておいた方がいいですね。今後、裁判になるかもしれませんから」

二対二での話し合い——話の流れからして、由樹はそうするに違いない。そうなったら由樹はご近所の代表として自分を選ぶだろう。どう考えても他の誰かを選ぶとは思えない。話が戻ってしまった。利香は泣きたくなった。由樹と直美の間で、自分がおろおろするだけなのは確実だった。

「北林先生……」と、相談者が物憂げに言う。

「これは言わん方がよかろうて思っとりましたばってん、言わせてもらいます」

「何ですか？」

「あの女は普通じゃなかですよ。ときどき、訳の分からん奇声ば発してですね、何かに取り憑かれたごたる顔ばするとですよ。恐ろしゅうてですね、まるで鬼のごたる顔でした。普通じゃなかという意味は分かりますよね？」

一瞬、相談者は由樹ではなかったのか、と利香は思った。直美が奇声を発するのを聞いたことがないし、鬼のような恐ろしい顔をしているのも見たことがない。だが、話の他の部分は合っており、相談者はどう考えても隣家の由樹に間違いなかった。真向かいの由樹だけが恐ろしい直美を見たのだろうか。その可能性もなくはないが、ただ悪口を言っているだけだろう。由樹は根も葉もないことで直美を誹謗し、これまでの鬱憤を晴らそうとしているだけだ――。

「仰ることは分かります。Aさんが普通でないなら、それはまた別問題ですが……本当にそうなんですか？」

「信じられんとですか？」

「そういう訳では……ただ、デリケートな問題ですので慎重に話をしませんと。それで……Aさんの様子が普通でないのは近所の方もご存じなんですか？」

弁護士が由樹の話の信憑性を問い質す。

これで由樹の嘘は暴かれる、と利香は思った。しかし、由樹はさらなる嘘を吐いた。

「ええ、もちろんです。隣のリカさんも、恐ろしか、て言いよらしたとです」

リカ？ 私だ――。

言っていない。そんなことを言うはずがない。

自分の発言を信用してもらいたくて、由樹が自分の名前を出した。しかもラジオで——
利香は怒気を覚えた。

「奥さん、個人名は出さないでください」

パーソナリティーが慌てて注意する。

「ああ、そぎゃんでしたね。近所の人なら私が誰か分かるかもしれませんがね。そして頭のおかしか女も」

ヒッヒッヒッと、相談者が品のない笑い声を漏らした。

何が可笑しいのか——利香はますます腹が立ってきた。ラジオを投げつきたい衝動に駆られ、思わず台所の向こうの隣家を睨む。

「もしもAさんがこの番組を聴いていたら不愉快でしょうし、嫌がらせがエスカレートするかもしれませんよ」

弁護士が訓戒を垂れるように言うと、それに相談者はつむじを曲げたのか、怒りのこもった溜め息を吐いた。

「あの女が不愉快になろうが知らんですよ。私はずっと不愉快だったとです。この二ヶ月、ずっと嫌な思いで過ごしてきたとです。何ですか、あなたたちは。もうちょっと私のことば考えてくられてもよかでしょ。相談者は私ですよ」

「奥さん、そう興奮なさないでください。落ち着いていただかないと番組が続けられません」
そのときだった。

ドウドウ、ダンダン——

ドウドウ、ダンダン——

突然、大音量のダンスミュージックが鳴り響いた。直美の家からだ。いつも直美が嫌がらせに鳴らしている音楽——それは当然、由樹の家にも届いていて、外からの音が大きくて聞こえづらかったが、ラジオからも聞こえた。やはり相談者は由樹だった。けたたましくて耳障りな音が、由樹の電話を通し、会話だけの静かだった番組に加わった。

「これが例の騒音ですか？」と、ラジオのパーソナリティーが深刻な声で聴く。

「ええ。せからしかでしょう？ そっちにはあまり聞こえんかもしれんですが……」

「こっちにもしっかり聞こえていますよ。漏れ聞こえるだけでもかなりうるさいですから、そちらの実態が伺い知れます。思っていた以上でしたね」

弁護士も呆然とした声で言った。

「やっと分かってもらえたごたるですね。これが昼前と夕方に決まって流れるとですよ。堪らんと言うのが分かりますでしょ？ 頭のおかしなああの女のせいで、こっちまでおかしくなっています。まだ病気になった人はおらっさんですばってん、そのうち不眠症とか、偏頭痛とか、何かしら躰に変調ば来す人の出てこらすかもしれんですね」

「確かに、一日に二回もこんな音楽を大音量で鳴らされたら堪りませんね」

同情して言うパーソナリティーに続いて、北林弁護士が憂慮の声を上げた。

「ちょっと気になったんですが……この時間に鳴ったことが今までにありましたか？」

「いいえ。そういえばこの時間は初めてですね。いつもはきっちり昼前と夕方に鳴っとりました。今日も昼前に鳴りましたし……夕方にはまだ早かですね」

「威嚇かもしれませんかね、奥さん」と、弁護士が声を落として言う。

「威嚇？」

「ええ。ラジオを聴いてるぞ、って」

「聴いとらすなら却ってよかです。お互い、もう話し合いばする必要はなかでしょう。あの女が出て行くだけですたい。だいたいあの女は……あっ」

由樹の声が何かに驚いたように、急に途切れた。

「奥さん？」とパーソナリティーが呼び掛ける。

「ああ、何ね、あんたは！」

由樹が叫び声を上げた。様子がおかしい。

「奥さん、どうかしたんですか？」

パーソナリティーのうろたえた声に、由樹の返事はなかった。

「何かあったんですか？ 奥さん、返事をしてください！」

「何ばしにきたとね？」

口元から電話を離れたようで、ラジオから聞こえてくる由樹の声が遠くなった。周りから聞こえるダンスミュージックに掻き消えそうだ。

誰かが由樹の家に侵入した——それはひとりしかいない。

「奥さん誰か来たんですか？」

パーソナリティーが呼び掛けても、やはり由樹は返事をしない。

「あんたが悪かたでしようが。どれだけせからしかか分らんとね。よう聴いてみなっせ。あんたが鳴らしとる音楽たい。家の中におったっちゃこぎゃんせからしかとばい」

「Aさんですね？ Aさんがきたんですね？」

由樹は答えない。

「何か言うたらどぎゃんね。ラジオば聴きよったとでしようが、反論のあるなら言うてみなっせ。何ならラジオに出るね？ ラジオに出て言いたいことば言うたらどぎゃんね」

「奥さん、Aさんなんですか？ Aさんに代わってください！」

パーソナリティーの必死の声が響く。

北林弁護士の「まずいなあ」と、投げやりに呟く声も聞こえた。

「そら何ね？ そぎゃんとば持ち出して、私ばどぎゃんしようていうとね？ 落ち着きなっせ。ねえ、落ち着きなっせて。そぎゃん危なかもんはしまいなっせ。しまいなっせて……ああ」

ドタバタと駆け回る足音がラジオから流れる。皿の割れる音や他の何かの壊れる音がする。狂ったような叫び声が聞こえる。それは由樹のものか直美のものか分からない。電話から離れてしまったようで、ふたりの立てる音はダンスミュージックに埋もれて聞き取れなくなってしまった。

利香はラジオを聴いていたリビングから台所へ急ぎ、小窓を開けた。隣家の様子を凝視する。由樹の家で何が起きているのかを探ろうとするが、更地越しに見える由樹の家はカーテンが閉まっていた。カーテンに人の動く影が薄く映っている。しかし、何がなにやらよく分からない。ただ、小窓を開けたために、叫び声はハッキリと聞こえた。と同時に、直美の家で掛けっぱなしになっているダンスミュージックも一段とうるさくなくなった。

仲裁に行くべきか、利香は考えた。だが、躰が震えて動けなかった。動けないまま由樹の家を見やる。不意にカーテンが揺れ、注視しているとカーテンの影が濃くなり、少し開いた。そこには亡霊のような顔でこちらを見ている直美がいた。利香は咄嗟にダイニングテーブルの下に身を隠した。凍るような寒気を覚えた。

争いは終わったようだ。叫び声は聞こえない。聞こえるのは不快なダンスミュージックだけ。

ラジオが由樹の家の様子を何か伝えていないかと思い、利香は這ってリビングに戻った。しかし、放送の継続を不可能と判断したようで、ラジオはコマーシャルになっていた。地元のお菓子のコマーシャルソングが流れており、牧歌的な子供の歌声は、こんな切羽詰まった状況にいかにもそぐわなかった。

由樹がどうなったのか、気掛かりだった。

傷を負わされたのは確実だろう。もっと酷いことになっているかもしれない。急いでいかないと間に合わないかもしれないと思い、利香は意を決して玄関へと走った。

ガチャ、ガチャ――

ガチャ、ガチャ――

玄関のノブを回す音がする。

直美だ！ 直美がこっちにやってきた！

鍵は掛けてあったが、利香は少しも安堵しなかった。

由樹の次は――

ドン、ドン、ドンと、直美が壊しそうなくらい容赦なく扉を叩いている。今にも扉を打ち破って入ってきそうな勢いだった。扉は頑丈なはずだが、果たして大丈夫だろうか――。

利香は青ざめた顔でリビングへ急ぎ、携帯を手にとった。ボタンを押そうとするが、手が震えて上手く押せない。

「はい、警察です」

助けを求めるべく、声を出そうとする。しかし、恐怖で気ばかりが焦り、「あっ、あっ」と言ったあとの言葉が続かない。

と、レースのカーテンの向こうで何かが動いた。

直美がカーテンの隙間から顔を覗かせている。目と目が合ってしまった。どんよりとして、半分眠っているような目。その顔にはシミのような赤いものが点々とついていた。視線を下ろすと、白いTシャツが真っ赤に染まっている。何かがキラリと光った。

利香は愕然となった。

カーテンが風に揺れた。

直美がゆっくりと動き、窓が開かれていく――。

「本当に酷い人たちね」

歪んだ顔に笑みを浮かべ、直美は何故だか嬉しそうに言った。

違う！ 違う！ と胸中で叫び、首を激しく振る。

異変を察したのか、籐ヨーランで眠っていたはずの赤ん坊が泣き出した。

利香は携帯をソファーに放り投げ、慌てて赤ん坊の上に覆い被さった。赤ん坊の泣き声はくぐもり、ダンスミュージックが再び勢いを増す。

ドウドゥ、ダンダン――

ドウドゥ、ダンダン――

直美の家から聞こえてくるダンスミュージックは、相変わらず地を這って脳天を揺らすような、不愉快極まりない重低音のビートを刻んでいる。

「もしもし、どうかなさったんですか？」と、ソファーの携帯から問い掛ける声がある。

利香は助けを求めたかった。しかし、赤ん坊から離れられなかった。

フンと鼻で笑い、直美が携帯を閉じた。そして勝利を祝するような奇声を発した。 了